Selector 05

板吉 選

連載「板吉走遊記」担当

『ましろ日』

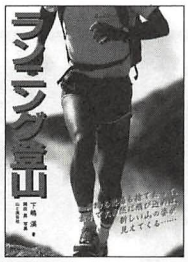
原作:香川まさひと
作画:若狭 星
小学館

たまたま本屋に立ち寄ったときに「あ、マラソンの漫画なんて珍しい」と発見し、そこから読み始めたのが『ましろ日』です。しかも、マラソンとはいっても実業団でもプロでもなく、一般ランナー、しかもハンディキャップをもつランナーにスポットを当てているところが興味深いのです。舞台は広島(『ましろ日』とは『ひろしま』の逆さ読み)。事故で突然失明してしまい、絶望の淵にいた1人の中年男性が、あることをきっかけにブラインドマラソンと出合い、さまざまな立場の伴走ランナー(高校生や病院の清掃員、信用金庫の営業担当、さらには…)らとストーリーを紡いでいきます。ブラインドマラソン特有のルール(例えば伴走者がランナーを引っ張ってしまうのはいけないなど)を初めて知ることもできましたし、「誰かを支えながら、一緒にフィニッシュを目指す」という部分も好き。マラソンを走っている人ならば、きっと「面白い!」と共感することができる作品です。

Selector 04

吉本亮 選

連載「トレイル通信」担当



『ランニング登山』

著:下嶋 渓
山と渓谷社

トレイルランという言葉がない時代の出版のため、直接的なタイトルで、内容は山を走る理由、装備や食料、技術や医学面などと、ここまでは普通の入門書に思える。しかし著者はロボット工学の先生なので、数式やグラフを多用してコースタイムも小数点以下3桁まで分析するなど学術的な論文にもなっている。「ランナーたるもの人目がある時は歩いてはならない!」と言うだけに、雨が降ってきたら予想できなかった自分のせいにし、夜の駅では古新聞をかき集めて体に巻いて寝る、と名登山家・加藤文太郎ばりのストイックさも。日帰り山行手記も多く、表日光連峰縦走の回では早朝発で山々を駆け抜けて、ビールとカロリーメイトを夕食代わりに、渋滞する車を尻目にいろは坂を駆け下りそのまま18㎞先の駅へ戻っている。自然に感動したり温泉を楽しんだりとオシャレになった令和のトレランに、昭和のパワーを注入してシャキッとしたいときにぴったり。絶版のため、古書店などでどうぞ。

Selector 07

高橋幸司 選

本誌編集長

『たった一人のオリンピック』

著:山際 淳司
KADOKAWA

スポーツノンフィクションの傑作『江夏の21球』で知られ、亡くなられて四半世紀になる山際淳司さんの名作の数々が、最近になって新書という形で再び読めるようになったのはうれしい。『21球』の江夏と古葉監督もそうだが、本書を読んで改めて感じるのは、「対比」によって人物を浮かび上がらせる筆致のうまさだ。表題作の、マラソンエリートの瀬古と、自力でシングルスカルでの五輪出場を目指す孤独な男との対比。瀬古ー中村監督へのクリティカルな視線と宗兄弟へのシンパシー。セバスチャン・コーとスティーヴ・オベットのライバル関係もしかり。そうした対比によって、華やかなスポットライトを浴びるほうではなく、そこから少し外れた人物にあたたかな光を当てるのだ。ちなみに、本書のなかで山際さんは、30年以上も前にマラソン界でのアフリカ勢台頭をさらりと予言している。生きていたら、今のマラソン界や東京五輪を取り巻く現状を、どう描いていただろうなあと思う。

Selector 06

和田悟志 選

スポーツライター

『私に付け足されるもの』

著:長嶋 有
徳間書店

我が家の本棚はパンパンだが、そこにある本の登場人物たちはそんなに走っていなかった。困ったときにいつも助けてくれるのは、大好きな小説家の長嶋有先生。彼の小説の登場人物は実に多彩だからだ。で、目に入った短編集が『私に付け足されるもの』だった。12篇のうち「瀬名川蓮子に付け足されるもの」という1篇の主人公がまさにランナー! 思い切って銀座にある有名メーカーの路面店で高価なランニングシューズを購入することから始まり、週に3度のランニングを習慣化し、サングラス、ウエア、ブルートゥースヘッドホンと徐々にギアも増えていく。また、近所の人とも出くわすようになり、それまでになかった近所付き合いもできてくる…。物語はさておき、ランナーには共感できる場面が多いはず。ちょっとした事件は起こるものの、劇的なことは何も起こらない。でも、40歳前後(だったはず)の主人公の心の揺れ動きが丹念に描かれており、著者のファンには堪らない1篇だ。